

『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第21巻 第4号 2019年3月 13頁～28頁

# ノーベル賞の国際政治学

——ノーベル文学賞と日本、1958～1967年の  
日本人候補に関する基礎的研究（2・完）——

吉 武 信 彦

## International Politics of the Nobel Prize:

The Nobel Prize in Literature and Japan, an Introductory Study  
of the Japanese Candidates for the Nobel Prize from 1958 to 1967 (2)

Nobuhiko YOSHITAKE

はじめに

1 ノーベル文学賞と日本

(1) ノーベル文学賞をめぐる視点

(2) 研究動向

2 日本人候補の推薦・選考状況と推薦運動

(1) 推薦状況の概観

(2) 選考状況の概観

(以上、第21巻第3号)

(3) 推薦運動の概観

(以下、本号)

3 日本人候補の著作翻訳状況

(1) 翻訳と選考

(2) 谷崎潤一郎の著作翻訳状況

(3) 西脇順三郎の著作翻訳状況

(4) 川端康成の著作翻訳状況

(5) 三島由紀夫の著作翻訳状況

おわりに

## 2 日本人候補の推薦・選考状況と推薦運動

### (3) 推薦運動の概観

本章第1節、第2節ではノーベル文学賞をめぐる推薦、選考についてその流れを概観したが、この2つの過程にもう1つの面を付け加えることができよう。それは、推薦運動である。推薦の一部と見ることもできるが、単に候補を推薦することにとどまらない、大掛かりな支援運動の場合もある。本節では、1つの事例として1960年代初めに日本外務省が展開した支援運動を紹介する<sup>1)</sup>。

日本政府は基本的にノーベル賞の受賞を歓迎してきた。1949年に湯川秀樹がノーベル物理学賞を受賞し、ノーベル賞が日本人にとって夢ではなく、現実になった後、日本人はノーベル賞の絶大な存在感を目の当たりにしたのであった。首相、閣僚を含む日本の国会議員の間では、1950年代に外国人をノーベル平和賞に推す国際的な推薦運動に参加する動きが見られたが、日本人を推す目立った動きはなかった。1960年代になると日本外務省が日本人のノーベル平和賞獲得をめざして動き出している。その最も典型的な事例は、1965年から1967年の3年間、日本外務省が主導して吉田茂元首相のノーベル平和賞受賞を画策したことである。これは、日本人初のノーベル平和賞受賞者を出そうとした試みであったが、失敗に終わっている<sup>2)</sup>。

文学賞においても、同様の動きが見られた。1960年代初めに日本外務省が日本人初の文学賞受賞をめざして積極的な情報収集活動、受賞工作を展開している。それは、松井明在スウェーデン大使（任期1959～1962年）による活動である<sup>3)</sup>。

1960年3月、松井大使は、「当国々立図書館長Uno Willers」<sup>4)</sup>から同年度のノーベル文学賞候補として西脇順三郎と谷崎潤一郎が上げられていることを伝えられ、スウェーデン・アカデミーに報告ができるように「両者についての検討（Comparing Analysis）及びその著書」を送付してほしいとの依頼を受けている。これはスウェーデン・アカデミーからの依頼とされている。この件を本省に報告した公信において、松井大使は「理化学の場合と異り、文学については必ずしも明瞭な尺度がある訳でなく、選衡は極めて困難と思はれるが、又一方東洋文学者中、受賞者の皆無に近い現状においては工作如何により受賞の可能性は充分あるものと考えられる」と述べ、さらに「ここ〔原文は繰り返し記号——筆者〕2・3年の間に本使としては是非ともわが国より受賞者を出したいと念願している」としている。そのための方策として、松井大使は前年度の文学賞受賞者や翻訳の関係から米英等から推薦を得ることを紹介している<sup>5)</sup>。

同年4月、上記依頼を受けて、外務省本省は谷崎潤一郎と西脇順三郎の両者に関する資料を収集し、英文の極めて詳細な履歴書、作品リスト、著書などを松井大使に送っている。松井大使は、到着後すぐに同資料を「当国々立図書館長Uno Willers」に提出している<sup>6)</sup>。

以上のように、1960年のノーベル文学賞選考において、同年3月に松井在スウェーデン大使

はスウェーデン・アカデミーからの要請を受けて、谷崎、西脇に関する資料を本省に依頼し、本省から届いた履歴書、作品リスト、著書などの資料をスウェーデン・アカデミーに提出している。これらの資料はスウェーデン・アカデミーでの選考において専門家報告書として実際に利用された<sup>7)</sup>。この背景には、スウェーデン・アカデミーが日本側に資料を要請したことに示される通り、1960年当時、スウェーデン・アカデミーは日本人候補に関して十分な情報を有しておらず、アカデミー会員が情報を欲していたと考えられる。また、時期的にもスウェーデン・アカデミーのノーベル委員会がまさに候補を絞り込みつつある段階で日本外務省が要請通りに資料を提供できたことも功を奏したと考えられる。最終的に、本章第2節の選考状況の概観で指摘した通り、1960年の選考には58名の候補がいたが、谷崎は最終段階の6名の候補まで残っている。

なお、ノーベル財団の記録によれば、1960年に谷崎を推薦したのはスウェーデン・アカデミー会員のSigfrid Siwertzであり、西脇を推薦したのは辻直四郎東京大学教授であった<sup>8)</sup>。

以上の1960年の出来事は、松井大使に対してノーベル文学賞の存在を強く印象づけたと考えられる。上記のように、松井は「東洋文学者中、受賞者の皆無に近い現状においては工作如何により受賞の可能性は充分あるものと考えられる」との現状認識を示し、さらに「ここ2・3年の間に本使としては是非ともわが国より受賞者を出したいと念願している」と明確に記している。松井大使は、まさに自身の大使在任中に日本人のノーベル文学賞受賞者を出すことをめざし、「工作」することを考えたのであろう。

1961年には松井大使からスウェーデン・アカデミーに働きかけている。1961年1月末あるいは2月初め、松井大使は「ノーベル賞受賞委員会書記長Willers」（上記国立図書館長と同一人物）に接触し、積極的な情報収集を行なっている。それによれば、1960年度にノーベル文学賞候補として谷崎、西脇が挙がっていたことを確認するとともに、1961年度の候補として1961年1月31日現在、「ストックホルム大学教授Henry Olsson」（スウェーデン・アカデミー会員、文学賞選考委員会委員）が川端康成を推しており、谷崎、西脇については推薦状が未着との情報を得ている。松井は川端と並んで、前年度候補の谷崎、西脇も候補リストに記載するよう要請し、日本から推薦状を速やかに取得することを約束したのに対し、先方は「自分一存で」この要請を受け入れている。松井はすぐに本省に川端、谷崎、西脇3名の推薦状を「至急（遅くとも2月末迄）発出」するよう手配を要請している<sup>9)</sup>。

その後、本省は松井大使に対して、西脇については前年と同様に辻直四郎東京大学教授が推薦者となり、電報、書簡が発出され、谷崎については嶋中事件（1961年2月に起こった右翼少年による中央公論社社長宅襲撃事件）により再三の連絡の末に中央公論社社長名の推薦電報がようやく発出されたが、書簡が発出されていないことを伝え、さらに川端の推薦者の選定には「苦慮した模様であるが、当方のあっせんもあり、三島由紀夫氏を推せん者として近く電報及び書簡を発出することとなった」としている<sup>10)</sup>。推薦者の調整に奔走する本省の苦勞が伝わる話である。

1961年には、本章第1節で記したように谷崎、西脇、川端が候補になっていた。ノーベル財

団の記録によれば、谷崎と西脇の推薦者は日本作家協会（The Japanese Authors' Union）と記録されている<sup>11)</sup>。1961年に谷崎と西脇を推薦した日本からの推薦状は、現時点でスウェーデン・アカデミー史料においては確認されていない。

川端の推薦者は、松井大使が情報を得た通りHenry Olssonストックホルム大学教授兼スウェーデン・アカデミー会員であった<sup>12)</sup>。上記の三島の川端推薦に関しては、三島の電報はスウェーデン・アカデミーに存在する。それは、「1961年ノーベル文学賞に川端康成を謹んで推薦致します。三島由紀夫」（1961年の電報であることはわかるものの、日付不明）というものである<sup>13)</sup>。また、三島の推薦状については、英訳を付けた上で日本ペンクラブ事務局長松岡洋子からスウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会事務局長ヴィレッシュ宛てに送付されている（1961年6月12日付け）<sup>14)</sup>。同書簡における松岡の説明によれば、三島は上記の電報を同年2月17日に送付したとしており、その文面もそのまま書簡に引用されている。三島の推薦状英訳は、スウェーデン・アカデミーに所蔵されている。この推薦状は、1997年に刊行された『川端康成・三島由紀夫往復書簡』に収録されているものとほぼ同じものである<sup>15)</sup>。

三島の川端推薦の経緯に関しては、川端と三島の往復書簡において確認できる。川端は、1961年5月27日付けの三島宛て書簡において以下のように記している。「さていつもいつも〔原文は繰り返し記号——筆者〕御煩はせするばかりで恐縮ですが例ののおべる賞の問題 電報を一本打つただけではいろいろの方面に無責任か（見込みはないにしても）と思はれますので極簡単に結構ですからすみせん文をお書きいただきませんか 他の必要資料を添へて英訳か仏訳かしてもらひあかみへ送つて貰ひます 右あつかましいお願ひまで」<sup>16)</sup>。この川端の書簡に対して、三島は同年5月30日付けの川端宛て書簡において「さて、ノーベル賞の件、小生如きの拙文で却つてご迷惑かとも存じますが、お言葉に甘え、僭越ながら一文を草し同封いたしました。少しでもお役に立てれば、この上の倅せはございません。又この他にも何なりとお申付け下さいますやうお願ひ申し上げます」と記している<sup>17)</sup>。これに示されるように、三島は、スウェーデン・アカデミーに対して電報のみを1961年2月の段階で打った後、同年5月27日付け書簡で川端から推薦文執筆の依頼を受け、同月30日付け書簡で日本語の推薦文を川端に提出したと考えられる。その推薦文は、川端が会長を務める日本ペンクラブの事務局において英訳され、1961年6月12日付けの上記松岡書簡でスウェーデン・アカデミーに提出されたと考えられる。

以上のように、1961年の選考においては、推薦締切日の段階で川端のみが候補になっていたところ、松井大使が働きかけることにより谷崎、西脇も候補に追加されたのである。本省も松井大使の要請に迅速に応え、推薦状発出に尽力している。その結果、川端の推薦に関しては、三島から電報、推薦状が出されることになったのである。こうした活動があったものの、同年に日本人候補が選考の最終段階に進むことはなく、日本側の推薦運動は実を結ばなかった。

1962年にも松井大使はスウェーデン・アカデミーとの接触を継続している。1962年2月、松井大使は「ノーベル賞委員会書記長Dr. Uno Willers」に接触し、1962年度のノーベル文学賞候

補者として同年2月1日現在34名が挙がり、日本から谷崎、川端が含まれているとの情報を得ている。その際、「日本二候補者の翻訳著書が少ないことが難点である。瑞アカデミー会員中にはHenrik Nyberg教授（ウプサラ大）の如く川端氏を強く推すものも存在するが、総じて翻訳著書僅少な日本人作家にはハンディ・キャップのあることは否み難い。この点もし右両作家の著書に翻訳計画が進行中であれば、その翻訳原稿なりとも送付して貰えば効果的であろう。又翻訳の場合はまず英訳が第一に行われるのが常であろうから米英筋から側面的に推薦工作が行われることが効果的であろう」との助言があったことも、松井大使は本省に伝えている<sup>18)</sup>。

1962年の選考においては、本章第2節のように日本人では谷崎、川端のほか、西脇も推薦されていたが、これら3候補は最終候補にはなれなかった。そこには、松井大使が本省に報告したように、日本人候補の著作の翻訳が少ないというハンディキャップがあった。松井大使は、ヴィレッシュから指摘されたこの点を痛切に感じたことであろう。松井大使の在スウェーデン大使としての任期は1962年に終わり、松井大使の念願は果たされなかった。また、1962年は、スウェーデン・アカデミー側も日本人候補について動きを見せた年であった。すなわち、本章第1節で紹介した通り、1962年3月、来日したスウェーデン・アカデミー会員のマッティンソンは、日本の推薦機関が弱体であり、早急に権威ある推薦委員会を設けることを提案したのである。それを受けて、日本側は「三人委員会」を発足させたが、その試みは不十分に終わった。その意味では、推薦方法についてもスウェーデン・アカデミーにインパクトを与えるような態勢をもたなかった点もマイナスに働いたと考えられる。

以上のように、1960年～1962年の動きだけを見ても、外務省が日本人のノーベル文学賞受賞に向けて積極的に情報収集活動を展開していたことがわかる。しかし、現在までのところ、松井大使離任後、ノーベル文学賞をめぐる同様の工作活動を継続した記録は公表されていない。特筆すべき工作活動自体がなかった可能性もあるが、現時点では不明である。ノーベル平和賞については、前述の通り1965年～1967年に吉田茂元首相をめぐる工作活動があったことが日本外務省の史料で明らかになっている。

少なくとも現時点で明白なことは、上記のノーベル文学賞をめぐる工作活動では松井大使の人脈と判断による部分が大きいことである。すなわち、基本的に松井大使は、スウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会書記のヴィレッシュとの間に親密な人間関係を構築し、推薦状況などの非公開情報も入手している（ノーベル賞の推薦、選考に関する情報は50年間非公開である）。また、その活動を支えたのは、日本人初の文学賞受賞者を出したいという松井大使の強い「念願」であった。スウェーデンでの活動は、松井大使の外交官としての有能さを示すものであろう。

なお、政府によるノーベル賞獲得運動が逆効果になることもありうるとの認識も外務省内にはあり<sup>19)</sup>、慎重な活動が必要であったことも確かである。政府が前面に出て活発に推薦運動をするだけがノーベル賞受賞への近道ではないのであろう。特に、松井大使が1962年に指摘していた日本人作家の翻訳書の問題は、推薦運動以上に大きな課題があることを日本側につきつけたと考



えられる。

### 3 日本人候補の著作翻訳状況

#### (1) 翻訳と選考

第2章第3節で指摘した通り、ノーベル文学賞の場合、日本語著作には翻訳の存在が欠かせない。スウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会書記、ヴィレッシュのいうように「総じて翻訳著書僅少な日本人作家にはハンディ・キャップのあることは否み難い」のである。翻訳書がなければ、スウェーデン・アカデミーにおいて作品を分析、評価することすら困難であり、日本人候補が有力候補になることはできないであろう。その意味では、1950年代から1960年代に日本人候補の作品がどの程度翻訳されていたかを確認することは、日本人候補のノーベル文学賞受賞を検討する上で必須の作業となる。

その前にノーベル文学賞受賞者と言語との関係を確認しておきたい。表3は、2017年までのノーベル文学賞受賞者が創作活動で使用した主な言語を出身国別、年代順に計算したものである。これを見ると、ヨーロッパの主要言語がいかに大きな割合を一貫して占めているかがわかる。また同時に、第二次世界大戦後、特に1950年代以降、ヨーロッパの中小国の言語、さらに非欧米諸国の言語に拡大したことがわかる。

スウェーデン人であるスウェーデン・アカデミー会員が理解できる言語には限りがある。彼らにとっては、スウェーデン語、それに言語的に極めて近いデンマーク語、ノルウェー語以外では、基本的に国際的に広く使われる言語、すなわち英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語が重要な位置を占めていたと考えられる。実際に表3によれば、歴代ノーベル文学賞受賞者が創作活動で使用する言語の上位5言語は、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、スウェーデン語である。これら以外の言語では、基本的に翻訳書が必要となる。そのため、質の高い翻訳書がいかに多く出版されているかが決定的な意味をもつことになろう。また、近年、スウェーデン・アカデミーは、選考過程において必要に応じて翻訳のない作品の翻訳を独自に専門家にさせることもある。いずれにしても、これらの翻訳の場合、それができる人材がいるかが重要である。特に、文学作品においては、翻訳の出来次第でその作品自体の評価も大きく左右される。文化的背景を踏まえ、登場人物の心理や行動などを的確に描写できる高い言語能力も要求されるのである。

また、選考では欧米文化以外の文化に対するスウェーデン・アカデミー会員の理解度も問われることになる。いかに質の高い翻訳書が生まれても、アカデミー会員が欧米とは異なるその作品世界の文化を理解し、偏見なくそれを楽しめなければ、高い評価にはつながらない。非欧米文化への理解度、寛容度が重要であり、さらには非欧米諸国から受賞者を出し、ノーベル文学賞を真の世界文学の賞にしようとする意思も必要となろう。

こうした理由から非欧米言語の作品は、長い間、ノーベル文学賞の選考において極めて不利な

表3 ノーベル文学賞受賞者の言語別人数

言語名	1890年代	1910年代	1920年代	1930年代	1940年代	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	2000年代	2010年代	計(2017年現在)
英語	1		2	4	2	3	1	2	2	4	4	3	28
フランス語	1	2	2	1	1	2			1		1	1	15
ドイツ語	2	3	1		1		1	1	1	1	2		13
スペイン語	1		1			1	1	2	2	1		1	11
スウェーデン語	1	1		1				2				1	7
イタリア語	1		1	1		1				1			6
ロシア語				1		1	1		1			1	6
ポーランド語	1		1						1	1			4
ノルウェー語	1		2						1				3
デンマーク語		2			1								3
ギリシア語							1	1					2
日本語							1			1			2
中国語											1	1	2
オランダ語	1												1
ペルシア語		1											1
フィンランド語				1									1
アイスランド語						1							1
セルボ・クロアチア語							1						1
ヘブライ語							1						1
イディッシュ語								1					1
チコ語									1				1
アラビア語									1				1
ポルトガル語										1			1
ハンガリー語											1		1
トルコ語												1	1
計	10	9	10	9	6	12	11	11	12	10	10	8	114

注 言語名は、2017年時点の受賞者人数の多い順に並べた。同数の場合は、受賞年が早い順に並べた。1913年のタゴールはベンガル語と英語、1969年のベケットはフランス語と英語、1987年のプロツキーはロシア語と英語で執筆したが、それぞれベンガル語、フランス語、ロシア語のみで便宜上分類している。受賞を辞退した1958年のパステルナーク、1964年のサルトルも含む。

出所 ノーベル財団ホームページ<<https://www.nobelprize.org/prizes/facts/facts-on-the-nobel-prize-in-literature/>>に基づき筆者が集計、作成した。英語とフランス語については人数を修正した。

立場におかれ、非欧米言語を使用する受賞者が始まったのは基本的に1960年代以降のことであった(表3参照)。非欧米地域から受賞者を出すことがいかに困難であったかがわかる。

以下では、1958年から1967年までの日本人候補について、個別に著作の翻訳状況をみてみよう。ノーベル賞は基本的に存命中の作家に授与されるため、それぞれの作家の死去までの翻訳を取り上げている。取り上げる順番は、ノーベル賞候補に推薦された順番とした。

## (2) 谷崎潤一郎の著作翻訳状況

まず谷崎潤一郎については、表4の通り、第二次世界大戦前からすでにフランス語、英語で翻訳が出ている(T-1、T-2)。しかし、谷崎が本格的に欧米において注目されたのは、1955年にアメリカ人文学者、サイデンステッカーにより『蓼食う虫』が英語に翻訳されて以降のことであろう(T-3)。この英訳がいかに大きな反響をもったかは、すぐにスウェーデン語(T-4)、ドイツ語(T-7)、フランス語(T-9)、さらにフィンランド語(T-10)にも翻訳されていることから明らかである。表4は、スウェーデン・アカデミー会員が主に利用したと考えられるドイツ語、英語、フランス語、フィンランド語、スウェーデン語の翻訳のみを列挙しているにすぎず、その他の言語にも谷崎の著作は翻訳されている。この谷崎作品の翻訳の成功は、その後、谷崎作品の翻訳をさらに生み出すきっかけになり、欧米で日本文学ブームを惹き起こすことになった。後述のように、これ以降その他の日本人作家の作品も本格的に欧米で翻訳されるようになった。

谷崎に関しては、その後も1957年に『細雪』の英訳が同じくサイデンステッカーの訳で出版され(T-8)、『細雪』はドイツ語、フランス語にもなっている(T-19、T-20)。1960年代には『鍵』、『刺青』、『瘋癲老人日記』などもドイツ語、英語、フランス語に翻訳されている(T-11、T-12、

表4 谷崎潤一郎主要著作の外国語翻訳一覧

番号	訳書の言語	訳書名 〔出版地・出版年〕 *1	出版年	訳者	訳書名(原著)	出版年 (原著) *2	スウェーデン・アカデミー・ノーベル図書館の所蔵状況
T-1	フランス語	<i>Plaisance de Genes</i> (Paris: Émile-Paul-Éditions)	1925	Wimmond van Gh. Jacob	『楽すればこそ』	1925 (1923)	
T-2	英語	<i>Ashtar and the Story of Shimizu: Modern Japanese Novel</i> (Tokyo: Hokuseido Press)	1928	Roy Humpherson, Hajime Ohta	『細雪』、『春琴抄』	1923	
T-3	英語	<i>Some Phoebe Noctua</i> (New York: Alfred A. Knopf)	1930	Edward G. Sodenbaker	『夢食う虫』	1929	
T-4	スウェーデン語	<i>Somige Phoebe som västare</i> (Stockholm: Wahlström & Rickstrand)	1930	Nils Fredrikson	英語訳 <i>Some Phoebe Noctua</i> (『夢食う虫』)	1925 (1923)	所蔵
T-5	英語	<i>Some Phoebe Noctua</i> (London: Secker & Warburg)	1930	Edward G. Sodenbaker	『夢食う虫』	1929	所蔵
T-6	フランス語	<i>Une ancre oroville</i> (Paris: Secker)	1930	Kikuo (Kiku) Yamata	『春琴抄』、『鍵』	1923	1960年翻字所蔵
T-7	ドイツ語	<i>Just der Augen: Roman</i> (Köln: J.B. Metzler)	1931	Carl Meyer-Glasson	英語訳 <i>Some Phoebe Noctua</i> (『夢食う虫』)	1925 (1923)	所蔵
T-8	英語	<i>The Malika Sisters</i> (New York: Alfred A. Knopf)	1931	Edward G. Sodenbaker	『細雪』	1944 1946- 1945	所蔵
T-9	フランス語	<i>Le Saut des arènes</i> (Paris: Gallimard)	1930	Sylvie Reynaud- Gabin, Kazuo Inoue	『夢食う虫』	1929	所蔵
T-10	フィンランド語	<i>Kokko makkarin muuttaja</i> (Helsinki: Tammi)	1930	Ygg Klemén	英語訳 <i>Some Phoebe Noctua</i> 、フランス語訳 <i>Le Saut des arènes</i> (『夢食う虫』)	1925 1929 (1923)	所蔵
T-11	ドイツ語	<i>Der Schlüssel: Roman</i> (Stuttgart: J.B. Metzler)	1931	Seichiro Yatazawa, Goshōei Kinoshita	『鍵』	1930	
T-12	英語	<i>Tales: Five Novels and Modern Japanese Stories: An Anthology</i> (London: Eyre & Spottiswoode)	1931	Ivan Morris	『刺青』	1930	所蔵
T-13	英語	<i>Tales: Five Novels and Modern Japanese Stories: An Anthology</i> (Tokyo: Hokuseido Press)	1931	Fujita Hatanoto	『刺青』	1930	所蔵
T-14	英語	<i>The Key</i> (New York: Alfred A. Knopf)	1931	Ronald Hibbett	『鍵』	1930	所蔵
T-15	スウェーデン語	<i>Åkaren</i> (Stockholm: Wahlström & Rickstrand)	1931	Ruth Edlund	英語訳 <i>The Key</i> (『鍵』)	1931 (1929)	所蔵
T-16	英語	<i>Seven Japanese Tales</i> (New York: Alfred A. Knopf)	1931	Ronald Hibbett	『春琴抄』、『細雪』	1930年か	
T-17	英語	<i>Seven Japanese Tales</i> (Tokyo: Taikei Publishing)	1931	Ronald Hibbett	『春琴抄』、『細雪』	1930年か	1954年翻字所蔵
T-18	フランス語	<i>Le Confession impudique</i> (Paris: Gallimard)	1931	Gaston Ronardreau	『鍵』	1930	
T-19	ドイツ語	<i>Die Schwestern Wakika: Roman</i> (Helsinki: J.B. Metzler)	1934	Seichiro Yatazawa	『細雪』	1944 1946- 1945	
T-20	フランス語	<i>Quatre anses</i> (Paris: Gallimard)	1934	Gaston Ronardreau	『細雪』	1944 1946- 1945	
T-21	英語	<i>Diary of a Mad Old Man</i> (Tokyo: Alfred A. Knopf)	1935	Ronald Hibbett	『癡癡老人日記』	1931	所蔵

\*1 谷崎が没した1963年までのドイツ語、英語、フランス語、フィンランド語、スウェーデン語の文庫を対象にした。また、基本的に同じ訳者の文庫が異なるのは出版社あるいは国から発行されている場合、著者の本意は、国の文庫を上げたい。しかし、スウェーデン・アカデミー・ノーベル図書館が所蔵する文庫に限り、国として取り上げた。

\*2 翻訳元が日本語の場合、その原刊本出版年を優先した。原著の場合、国産語訳の出版年を優先した。

出典 スウェーデン・アカデミー・ノーベル図書館、スウェーデン王立図書館、大英図書館、国立国会図書館(日本)の所蔵書目及び(所蔵元一部全集)第24巻(中央公論新社、2017年)に基づき、要旨作成。

T-14、T-18、T-21)。

また、谷崎作品のスウェーデン語訳については、1965年の谷崎死去までに2冊が確認される。1955年の『夢食う虫』(T-4)と1962年の『鍵』(T-15)である。それぞれアメリカ人文学者のサイデンステッカーとヒベットの英訳からの重訳となっている。文学において日本語から直接スウェーデン語に翻訳できる人材がスウェーデンにはまだ育っていなかったためであろう。

スウェーデン・アカデミーにある図書館は、代表的な谷崎作品の翻訳を所蔵している。その言語は以下の通りである(翻訳の古い順)。

『春琴抄』: 英語 (T-17)、フランス語 (T-6)

『夢食う虫』: 英語 (T-5)、ドイツ語 (T-7)、フランス語 (T-9)、フィンランド語 (T-10)、スウェーデン語 (T-4)

『細雪』: 英語 (T-8)

『鍵』: 英語 (T-14)、スウェーデン語 (T-15)

『刺青』: 英語 (T-12、T-13)

『癡癡老人日記』: 英語 (T-21)

以上の所蔵状況から推測すると、スウェーデン・アカデミーにとって谷崎作品は英語版の比重が大きかったと考えられる。その点では、多くの英訳を行なったサイデンステッカー、ヒベット



は重要な役割を果たしたといえよう。

(3) 西脇順三郎の著作翻訳状況

次に西脇順三郎の著作がいかに翻訳されているかを見てみよう。表5の通り、西脇の場合、翻訳は極めて少ない。『定本西脇順三郎全集』を見ると、欧文の著作としてまず3冊が挙げられる(N-1、N-2、N-3)。これらは、翻訳ではなく、西脇本人がフランス語、英語で執筆したものである。西脇がイギリス留学中に出版社に原稿を持ち込みロンドンで出版した*Spectrum* (『スペクトラム』) (N-2) 以外は、フランスの出版社に出版を打診したものの、失敗した未公開のもの(N-1)、私家版として本の体裁は整えられていたが、公刊されなかったもの(N-3)である<sup>20)</sup>。その他には、朝日新聞社が出していた英文雑誌*Japan Quarterly*に載った英語詩*January in Kyoto* (「京都の1月」)がある(N-9)。これはアメリカの詩人、エズラ・パウンドから評価され、その紹介で同氏の娘によるイタリア語訳の話が進んだ。この娘の尽力により、雑誌の英語詩と私家版*Poems Barbarous* (『夷狄詩篇』) (N-3) の詩の抜粋が1959年にイタリアで小冊子として出版されている(N-11)<sup>21)</sup>。1970年代にも、西脇の英語詩に版画などを付けたものが出版されている(N-19、N-20、N-21、N-22)。

西脇がノーベル文学賞に推薦されていた1950年代、1960年代に欧文で利用できる作品は、『ス

表5 西脇順三郎主要著作の外国語翻訳一覧

番号	言語・原著の言語	書名・訳題名 (出版社・出版社) *1	出版年・ 執筆年	翻訳者	訳題名(原著)	出版年 (原著)	スウェーデン・アカデミー・ノー ベル賞審議の考慮状況
N-1	フランス語	<i>Une Moinie sentimentale</i> (集古堂)	1924		本人がフランス語で執筆		
N-2	英語	<i>Spectrum</i> (London: The Grafton Press)	1925		本人が英語で執筆		考慮
N-3	英語	<i>Poems Barbarous</i> (私家版)	1930		本人が英語で執筆		
N-4	日本語	<i>Ambarvalis</i> (東京・権柄木村)	1933				
N-5	日本語	『夢・夢の夜』 (東京・権柄木村)	1947				
N-6	日本語	『夢・夢の夜』 (東京・東京堂)	1947				
N-7	日本語	『現代の風』 (東京・東京堂)	1952				
N-8	日本語	『あふらふら』 (東京・トロン社)	1955				考慮
N-9	英語	<i>Japan Quarterly</i> , Vol. 5, No. 1, January-March, 1956 <i>January in Kyoto</i>	1956		本人が英語で執筆		考慮
N-10	日本語	『あふらふら』 (東京・東京堂)	1956				考慮
N-11	イタリア語	<i>Giamae a Kyoto</i> (Milano: Adelphi editore)	1959	Maria de Rubeoritz	<i>January in Kyoto</i> ほか	1959年頃	
N-12	日本語	『あふらふら』 (東京・権柄木村)	1959				考慮
N-13	日本語	『あふらふら』 (東京・東京堂)	1962				
N-14	日本語	『あふらふら』 (東京・東京堂)	1962				
N-15	日本語	『西脇順三郎全集』(東京・筑摩書房) 1963	1963				考慮
N-16	日本語	『あふらふら』 (東京・筑摩書房)	1967				
N-17	日本語	『あふらふら』 (東京・筑摩書房)	1968				
N-18	日本語	『あふらふら』 (東京・筑摩書房)	1970				
N-19	英語	<i>Circoncisione</i> (東京・筑摩書房)	1972		本人が英語で執筆、西脇順三郎によるグラ フィックあり		
N-20	英語・日 本語	<i>Opuscolo a Jay</i> (東京・筑摩書房)	1972		本人が英語で執筆、西脇順三郎による日本語 付き、西脇順三郎による原稿あり		
N-21	イタリア語	<i>Giamae a Kyoto</i> (Milano: Mulino editore)	1972	Maria de Rubeoritz	<i>January in Kyoto</i> ほか、西脇順三郎による 原稿あり	1959年頃	
N-22	英語・日 本語	<i>Paradise in Jay, Poems &amp; Drawings</i> (東京・筑摩書房)	1974		本人が英語で執筆、本人による原稿(本人 のよここび)の翻訳(リフレット)付き、西脇 順三郎による原稿あり		
N-23	日本語	『あふらふら』 (東京・筑摩書房)	1978				

\*1 西脇が死去した1962年までの英語、フランス語、イタリア語、日本語の文献(主に詩集)を対象とした。  
 注例 スウェーデン・アカデミー・ノーベル賞審議、スウェーデン国立図書館、大英図書館、国立国会図書館(日本)の所蔵書目録(定本西脇順三郎全集第3巻、第12巻、別巻)筑摩書房、(1964年)に基づき、  
 筆者作成。

ペクトラム』(N-2)、雑誌の英語詩(N-9)、イタリア語訳の詩集(N-11)のみであった。特に、本格的な詩集としてまとめたものは、1925年出版の『スペクトラム』だけである。スウェーデン語訳の詩集はなかった。西脇は、表5の通り日本語では詩集を次々に出版している。それに比べると、欧文の作品は極めて少ない。スウェーデン・アカデミー・ノーベル委員会は、1961年まで候補の西脇について翻訳、資料など判断材料がないことを理由に絞り込みの段階で西脇を落としている<sup>22)</sup>。評価される以前に、翻訳という問題を抱えていた。

なお、スウェーデン・アカデミー図書館には、『スペクトラム』(N-2)と雑誌の英語詩(N-9)のほか、4冊の日本語の詩集(N-8、N-10、N-12、N-15)が所蔵されている。スウェーデン・アカデミーが日本語の詩集を購入したとは考えにくく、1960年代前半に西脇の推薦運動の中で日本側から資料として提供された可能性が高い。たとえば、第2章第3節で論じた1960年の松井大使による工作活動の際、谷崎、西脇の著作もスウェーデン・アカデミーに提出されているが、西脇については欧文の*Spectrum*(N-2)、*Gennaio a Kyoto*(N-11)、*January in Kyoto*(N-9)、『失われた時』(N-12)などが含まれている<sup>23)</sup>。

#### (4) 川端康成の著作翻訳状況

川端康成の翻訳については、いかなる特徴があるのであろうか。表6は、川端の亡くなる1972年までの主要言語への翻訳状況である。第二次世界大戦中に『伊豆の踊子』のドイツ語訳(K-1)が出て、戦争直後にもそれが再刊されているが(K-2)、基本的に翻訳が本格化するのは1950年代中葉以降のことである。しかし、川端がノーベル賞を受賞する1968年までの翻訳状況を見ると、必ずしも多くない。この点は、スウェーデン・アカデミーの選考でも意識されていた。たとえば、1968年12月10日のノーベル賞授賞式でスウェーデン・アカデミーを代表して歓迎演説をしたエステルリングは、翻訳の少なさについて以下のように述べている。

「そして、長年の間に氏ははるか遠く日本の国境を越えて海外でも名声を博するようになったのです。実際には、氏の作品のうち、三編の小説と、数編の短編だけが、これまでにいくつかの言語に訳されているに過ぎません。これは明らかに翻訳が特にむずかしいことにもよりますし、翻訳は目のあらい濾過器でもあるからです。この濾過器にかけると、氏のゆたかな表現力に富む言葉のかずかずの微細なニュアンスが失われるに違いないのです。しかし、これまでに翻訳された氏の作品は、氏の個性からにじみ出た典型的な画像を十分に伝えています<sup>24)</sup>。

ここで言及された3編の小説とは、『雪国』、『千羽鶴』、『古都』のことであり、エステルリングは演説の中でそれぞれ具体的に内容の分析を行なっている。

では、翻訳はいかに進んだのであろうか。1950年代中葉以降、ドイツ語訳と英語訳が並行して行なわれ、それをスウェーデン語訳、フランス語訳がやや遅れて追いかける形で進んだことがわかる。たとえば、表6の主要著作についてドイツ語訳、英語訳、フランス語訳、スウェーデン語訳の出版年を比較したのが表7である。川端がノーベル賞を受賞した1968年までに絞ると、

表6 川端康成主要著作の外国語翻訳一覧

番号	訳書の言語	訳書名 (括弧内:出版社/漢字名) *1	出版年	翻訳者	翻訳元(原書)	出版年 (原書) *2	スウェーデン・アカデミー・ノー ベル賞書籍の掲載状況
K-1	ドイツ語	Die kleine Tänzerin von Izu. Oscar Beut, Fünfziges Jubiläum, moderne japanische Erzählungen (München:Stollberg-Lankmann-Verlag.)	1942	Oscar Beut	『伊豆の踊子』	1928	
K-2	ドイツ語	Die kleine Tänzerin von Izu. Oscar Beut, Fünfziges Jubiläum, moderne japanische Erzählungen (Hamburg:Robert Müller Verlag.)	1942	Oscar Beut	『伊豆の踊子』	1928	既載
K-3	英語	The Izu Dancer: A Story The Atlantic Monthly, Vol. 195, January 1955	1955	Edward G. Seidensticker	『伊豆の踊子』	1928	
K-4	ドイツ語	Tausend Kränze München:Carl Hanser Verlag)	1956	Sachiko Yatsushiro	『千羽鶴』	1952	
K-5	英語	Dandel Kamei et. al., Modern Japanese Literature: An Anthology (New York: Grove Press)	1956	Edward G. Seidensticker	『雪国の手紙』(後に『雪くらの手紙と恋書』(購入企画)1960年3月)	1946	既載
K-6	英語	Snow Country New York: Alfred A. Knopf	1956	Edward G. Seidensticker	『雪国』	1946	
K-7	ドイツ語	Schneeland München:Carl Hanser Verlag)	1957	Oscar Beut	『雪国』	1946	既載
K-8	英語	Snow Country London: Alfred A. Knopf)	1957	Edward G. Seidensticker	『雪国』	1946	既載
K-9	スウェーデン語	Snöland (Stockholm: Bonnier)	1957	Per Erik Wahlund	英語版 Snow Country(『雪国』)	1956 (1946)	既載
K-10	ドイツ語	Tausend Kränze (Frankfurt am Main: Fischer)	1959	Sachiko Yatsushiro	『千羽鶴』	1952	既載
K-11	英語	Tausend Kränze New York: Alfred A. Knopf)	1959 *3	Edward G. Seidensticker	『千羽鶴』	1952	既載
K-12	フランス語	Mois d'automne Paris: Librairie Plon.)	1960	Haruko Fujimori, Arnet Quémener	『千羽鶴』	1952	既載。1979年改題再載
K-13	フランス語	Pays de neige (Paris: Editions Albin Michel)	1960	Haruko Fujimori, Arnet Quémener	『雪国』	1946	既載
K-14	英語	"The Moon on the Water" Ivan Morris et. al., Modern Japanese Stories: An Anthology (London: Eyre & Spottiswoode)	1961	George Saito	『水月』(『新潮』1952年11月)	1953	既載
K-15	英語	The Izu Dancer (Tokyo: Hana Shobo)	1962	Edward G. Seidensticker, Leon Posen, George Saito	『伊豆の踊子』、『舞会』(改題)1946年2月、『ほくろの手紙』、『水月』	1928 1946 1953	
K-16	ドイツ語	Kyoto oder die jungen Jägerinnen in der alten Kaiserstadt München:Carl Hanser Verlag)	1965	Walter Simon, 松方 Yasuji Kamei	『古都』	1962	既載
K-17	スウェーデン語	Kyoto (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1966	Dav Jonsson	ドイツ語版 Kyouto/Kranzle(『千羽鶴』)	1956 (1952)	
K-18	ドイツ語	Die Tänzerin von Izu, Tausend Kränze, Schneeland, Kyoto, Anspielende Werke München:Carl Hanser Verlag)	1965	Oscar Beut, Sachiko Yatsushiro, Walter Dorat	『伊豆の踊子』、『千羽鶴』、『雪国』、『古都』	1928 1952 1946 1962	既載
K-19	ドイツ語	Tausend Kränze, Schneeland (München: Buchverlag Dr. Loh)	1965	Sachiko Yatsushiro, Oscar Beut	『千羽鶴』、『雪国』	1952 1946	
K-20	スウェーデン語	Kyoto eller de unga jägarna i den gamla kejsarstaden (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1965	Vanja Lantz	ドイツ語版 Kyoto oder Die jungen Jägerinnen in der alten Kaiserstadt(『古都』)	1966 (1962)	既載
K-21	ドイツ語	Ein Almschmuck in Winter, Roman München:Carl Hanser Verlag)	1969	Stephan Schwarzstein, Mikko Sajo	『山の雪』	1964	
K-22	ドイツ語	Zwölfteil eines Sechserhügeljäger: eine Auswahl aus dem Werk des Meisterschützen (München: Henschelverlag)	1969	Oscar Beut	『英雄伝』、『舞城』、『十六歳の日記』、『種子』、『文章朝聖』1926年1月、『志士』、『文章朝聖』1929年4月	1953 1951 1925 1928 1928	
K-23	ドイツ語	Die Tänzerin von Izu, Tausend Kränze und andere ausgewählte Werke (München: Ceres-Verlag)	1969	Oscar Beut, Sachiko Yatsushiro, Walter Dorat	『伊豆の踊子』、『千羽鶴』、『雪国』、『古都』	1928 1952 1946 1962	1930年初版再載
K-24	英語	Japan, the Beautiful and Mysterious (Stanford: Haki Foundation)	1969	Edward G. Seidensticker	『美しい日本の私—その再訪』	1968	既載
K-25	英語	Notes of the Sleeping Beauty and Other Stories (Tokyo: Rodansha International)	1969	Edward G. Seidensticker	『眠れる美女』、『片断』、『南歌』	1961 1968 1923	
K-26	英語	Snow Country and Tausend Kränze New York: Alfred A. Knopf)	1969	Edward G. Seidensticker	『雪国』、『千羽鶴』	1946 1952	
K-27	フランス語	Le dénouement de la montagne (Paris: Editions Albin Michel)	1969	Sylvie Magnault-Garier, Hisashi Sumitani	『山の雪』	1964	
K-28	スウェーデン語	Huset med de senaste skåpvalerna (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1969	Erik Gustafsson	『眠れる美女』	1961	既載
K-29	英語	The Sound of the Mountain New York: Alfred A. Knopf)	1970	Edward G. Seidensticker	『山の雪』	1964	既載
K-30	フランス語	Les Jolies femmes (Paris: Editions Albin Michel)	1970	Frank Siefert	『眠れる美女』	1961	
K-31	フランス語	Paris (Paris: Editions Albin Michel)	1971	Philipe Pons	『古都』	1962	
K-32	英語	The Master of Izu New York: Alfred A. Knopf)	1972	Edward G. Seidensticker	『名人』	1964	1972年ロンドン版再載

\*1 翻訳が発表された99年までのドイツ語、英語、フランス語、スウェーデン語の文庫を対象にした。また、基本は1冊に1冊の文章が異なる出版社あるいは国から発行されている場合、最初の出版社、最初の文庫版を上げたとし、スウェーデン・アカデミー・ノーベル賞書籍が収録する文庫に因り、例外として取り上げた。  
\*2 翻訳元が日本語の場合、その初刊本初版の出版年を併記した。左欄の場合、初刊本の出版年を示した。  
\*3 著作権が1968年という書誌情報もある。  
出典 スウェーデン・アカデミー・ノーベル賞書籍、スウェーデン国立図書館、大英図書館、国立国会図書館(55本の作品書および『翻訳目録』川端康成全集第29巻(朝川社、1959年)に基づき、筆者考査。

代表的な翻訳は『伊豆の踊子』(K-1、K-3)、『千羽鶴』(K-4、K-11、K-12、K-17)、『雪国』(K-6、K-7、K-9、K-13)、『古都』(K-16、K-20)の4冊になる。ドイツ語には4冊とも訳されているのに対して、英語訳では『古都』が欠けている。フランス語訳は『伊豆の踊子』、『古都』が欠けている。スウェーデン語訳に関しても『伊豆の踊子』が欠けている。スウェーデン語訳でさらに興味深いのは、『雪国』(K-9)が英語版からの重訳であり、『千羽鶴』(K-17)と『古都』(K-20)がともにドイツ語版からの重訳であった。谷崎の著作と同様に、1960年代までは日本文学を直

表7 川端康成主要著作のドイツ語訳、英語訳、フランス語訳、スウェーデン語訳出版年の比較

川端康成主要著作 *1	原著出版 年 *2	ドイツ語訳	英語訳	フランス 語訳	スウェー デン語訳
『伊豆の踊子』	1926	1942	1955		
『雪国』	1948	1957	1956	1960	1957
『千羽鶴』	1952	1956	1959	1960	1966
『古都』	1962	1965			1968

\*1 川端がノーベル文学賞を受賞した1968年までの文献を対象にした。

\*2 原著出版年は、その単行本初版の出版年を明示した。

出所 表6に基づき、筆者作成。

接日本語からスウェーデン語に訳す人材に欠けていたのである。表6の通り、1969年に川端の『眠れる美女』が日本語からスウェーデン語に翻訳され、出版されている。

スウェーデン・アカデミー図書館の所蔵書について言えば、川端の代表的著作はドイツ語、英語、フランス語、スウェーデン語の各版が基本的に所蔵されている。川端のノーベル賞受賞後も、ドイツ語、英語、スウェーデン語の翻訳が継続して入れられている。

### (5) 三島由紀夫の著作翻訳状況

最後に三島由紀夫の著作がいかに翻訳されたかを見てみよう。その翻訳状況は、表8の通りである。三島は、他の日本人候補に比べて、1925年生まれで最も若い作家である（谷崎は1886年生まれ、西脇は1894年生まれ、川端は1899年生まれ）。プロフェッショナルな作家となったのも第二次世界大戦後のことである。そうした状況があるにもかかわらず、1970年に自決するまでの翻訳点数は、ドイツ語、英語、フランス語、スウェーデン語に限っても多いことが指摘できる。表8において、川端がノーベル賞をもらう1968年までの翻訳点数は24件である。内訳は、ドイツ語訳6点、英語訳11点、フランス語訳3点、スウェーデン語訳4点である。これまでの候補、谷崎、西脇、川端以上に幅広く翻訳がされているといえよう。

また、翻訳された単行本の種類も多い。1968年までの期間、『潮騒』（M-1、M-6、M-18）、『近代能楽集』（M-2、M-3、M-11、M-14）、『仮面の告白』（M-4、M-15）、『夜の向日葵』（M-5）、『金閣寺』（M-7、M-8、M-10、M-12）、『宴のあと』（M-13、M-17、M-20）、『午後の曳航』（M-16、M-22、M-24）、『真夏の死』（M-19）、『サド侯爵夫人』（M-21）、『禁色』（M-23）の10冊にも及ぶのである。

さらに、これらの翻訳の特徴として、日本語の原著が出版されてから時間をおかずに翻訳されていることがある。日本とほぼ同時代的に外国で三島の著作が翻訳され続けたのである。これは、谷崎、西脇、川端には見られない傾向である。特に、谷崎、川端の場合、すでに文壇において地



表8 三島由紀夫主要著作の外国語翻訳一覧

番号	原書の種類	原書名 (出版社・版元) *1	出版年	翻訳者	翻訳元(原書)	出版年 (原書)	スウェーデン・アカデミー・ノーベル賞授賞の経緯や状況
M-1	英訳	The Sound of Rivers (New York: Alfred A. Knopf)	1956	Meredith Weatherby	『河川の音』	1954	原書
M-2	英訳	Five Modern Art Plays (New York: Alfred A. Knopf)	1957	Donald Keene	『近代戯曲集』	1956	原書
M-3	ドイツ語	Fünf moderne Art-Spiele (Frankfurt bei Mainberg: Suhrkamp)	1958	Gerd von Ullrich	英語訳 Five Modern Art Plays [近代戯曲集] 原書	1957 (1958)	
M-4	英訳	Confessions of a Monk (New York: New Directions)	1958	Meredith Weatherby	『僧の告白』	1948	原書
M-5	英訳	Fedigt Juleaften: A Play in Four Acts (Tokyo: Heibonsha Press)	1955	Shigeo Shimozaki, Virgil A. Warner	『夜の四白幕』	1953	原書
M-6	ドイツ語	Der Sternberg (Frankfurt bei Mainberg: Suhrkamp)	1959	Gerd von Ullrich, Günar Dahl	『河川の音』	1954	1951年匿名再版
M-7	英訳	The Temple of the Golden Pavilion (New York: Alfred A. Knopf)	1959	Ivan Morris	『金閣寺』	1956	原書
M-8	ドイツ語	Der Tempelberg (München: Suhrkamp)	1961	Walter Dornit	『金閣寺』	1956	
M-9	英訳	"The Priest and His Love" Ivan Moris ed. Modern Japanese Stories: An Anthology (London: Eyre & Spottiswoode)	1961	Ivan Morris	『志賀年上人の恋』『文藝春秋』1954年10月	1954	原書
M-10	フランス語	Le Pénitencier (Paris: Gallimard)	1961	Marc Mauriant	『僧の告白』	1956	
M-11	ドイツ語	Sechs moderne Art-Spiele (Frankfurt bei Mainberg: Suhrkamp)	1962	Gerd von Ullrich	英語訳 Five Modern Art Plays [近代戯曲集] 原書 英訳 The Temple of the Golden Pavilion [金閣寺]	1957 (1958)	
M-12	スウェーデン語	Sex moderna konstspels (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1962	Torsten Blomkvist	英語訳 The Temple of the Golden Pavilion [金閣寺]	1956	原書
M-13	英訳	After the Banquet (New York: Alfred A. Knopf)	1963	Donald Keene	『宴のあと』	1958	原書
M-14	スウェーデン語	Fem moderna Art-spel (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1963	Per Erik Nilsen	英語訳 Five Modern Art Plays [近代戯曲集] 原書	1957 (1958)	原書
M-15	ドイツ語	Gästfrihet eller Måka (Frankfurt bei Mainberg: Suhrkamp)	1964	Wolfgang Iltis	英語訳 Confessions of a Monk [僧の告白] 原書	1958 (1958)	
M-16	英訳	The Sailor Who Fell from Heaven with the Sea (New York: Alfred A. Knopf)	1965	John Harker	『舟長の恋』	1963	原書
M-17	フランス語	Merle le Japonais (Paris: Gallimard)	1965	Gaston Pérocheau	『宴のあと』	1958	
M-18	スウェーデン語	Ännu en sjöman som föll från himlen (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1965	Bergo Bergqvist	英語訳 The Sound of Waves [東照] 原書	1958 (1958)	原書
M-19	英訳	Death of Misogami and Other Stories (New York: New Directions)	1965	Edward G. Seidensticker, Ivan Morris, Donald Keene, Geoffrey W. Sargent	『真実の死』『河川の音』	1951ほか	原書
M-20	ドイツ語	Nach dem Banquet (Frankfurt bei Mainberg: Suhrkamp)	1967	Sachiko Yatazshiro	『宴のあと』	1958	
M-21	英訳	Sköner än Sol (New York: Grove Press)	1967	Donald Keene	『サザン島夫人』	1955	海渡、1971年東京版も再版。
M-22	スウェーデン語	Sjömannen som föll från himlen (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1967	Mirjet och Martin Edlund	英語訳 The Sailor Who Fell from Heaven with the Sea [舟長の恋] 原書	1965 (1965)	原書
M-23	英訳	Festfrihet eller Gåsar (New York: Alfred A. Knopf)	1965	Alfred H. Marks	『宴のあと』	1958	原書
M-24	フランス語	Le Marin qui est tombé du ciel (Paris: Gallimard)	1965	Gaston Pérocheau	『舟長の恋』	1963	
M-25	英訳	Thirst for Love (New York: Alfred A. Knopf)	1969	Alfred H. Marks	『愛の渇き』	1958	
M-26	フランス語	Le Sommeil des Bêtes (Paris: Gallimard)	1968	Gaston Pérocheau	『河川の音』	1954	
M-27	スウェーデン語	Äfter damtbladet (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1965	Vanja Lantz	英語訳 After the Banquet [宴のあと] 原書	1958 (1958)	
M-28	ドイツ語	Der Seemann der alle die See verriet (Frankfurt bei Mainberg: Suhrkamp)	1970	Sachiko Yatazshiro	『舟長の恋』	1963	
M-29	英訳	Sun and Sand (Tokyo: Kinokuniya International)	1970	John Burt Foster	『太陽と砂』	1968	原書
M-30	フランス語	Une nuit moderne (Paris: Gallimard)	1970	Gaston Pérocheau	『近代戯曲集』	1956	
M-31	スウェーデン語	Den tredje sjömannen (Stockholm: Albert Bonniers Förlag)	1970	Erik Svanström	『真実の死』	1962	原書

\*1 三島が発表したドイツ語、英語、フランス語、スウェーデン語の文庫を対象にした。また、基本的に同じ原書の文庫が異なる出版社あるいは異なる刊行されている場合、最初の出版元、最初の文庫版を記した。

\*2 翻訳元が日本語版の場合、その発行年と原書の出版年を併記した。転写の場合、国名と原書の出版年を示した。  
 例: スウェーデン・アカデミー・ノーベル賞授賞、スウェーデン王立図書館、大英図書館、国立国会図書館、日本の国政図書および情報学書目録、三島由紀夫全集(続巻)『河川の音』(河内社、1976年)に基づき、筆者作成。

位を確立し、多くの代表的な著作を世に出していた段階で1950年代中葉以降、翻訳が本格化したのである。それに比べると、三島の場合、若手作家として文壇に登場し、次々に新作を世に問う中で、その著作が翻訳されたのである。また、それを可能にしたのが、三島とキーンら翻訳者との親密なつながりである。キーンは1922年生まれであり、三島とほぼ同世代である。キーンが三島の自決直前までいかに交友関係を結び、翻訳などを通して外国で三島を売り込もうと貢献したかは、キーンの自伝によく示されている。キーンは、三島がいかにノーベル文学賞を欲しがっていたか、身近に感じており、三島がもらうと思いついでさえた。そのため、1968年に川端が受賞したことが三島の自決につながったとの見方をしている。さらに、川端が自決したのもノーベル賞との関連と見ており、作家の大岡昇平の言葉を借りて、「ノーベル文学賞が三島と川端を



殺したのだった」と述べている<sup>25)</sup>。

三島の著作のスウェーデン語版については、上記の通り、1968年までに4点が確認できる。すなわち、『金閣寺』(M-12)、『近代能楽集』(M-14)、『潮騒』(M-18)、『午後の曳航』(M-22)である。どれも英語版からの重訳であるが、『潮騒』以外の3冊は、英語版の出版後、比較的短期間のうちに出版されている。ここでも日本語から直訳されたスウェーデン語版は、1970年の『美しい星』(M-31)まで待たねばならなかった。

スウェーデン・アカデミー図書館における三島の翻訳の所蔵状況はいかなる特徴があるのだろうか。表8の通り、三島の主要著作の翻訳は所蔵しているが、1968年までの翻訳書24件のうち、16件を所蔵し、ドイツ語版の『潮騒』(M-6)以外はすべて英語版あるいはスウェーデン語版である。スウェーデン語版は4件であるため、所蔵の大半は英語版ということになる。前述のように、三島の著作の日本語版がすぐに英語版になったため、三島に注目し、その著作活動を追ううちに自然にこうした結果になったのであろう。

## おわりに

以上、本稿ではノーベル文学賞受賞をめぐる日本人候補の動向を考察するための基礎的作業を行なった。

第1章では、日本におけるノーベル文学賞研究の動向をまとめた。ノーベル賞については一般的にあこがれが強く、選考結果を絶対視する「神話」ができていることを指摘した後、選考過程についての分析が不十分であることを指摘した。

第2章では、そうした「神話」を打ち破る手段として、選考過程における日本人候補に注目して、これまでいかに紹介されてきたのかを実際の推薦状況、選考状況との対比の中で分析した。選考過程については、50年間、情報が開示されないため、実際の状況とは異なる情報が流布していた。1967年までの実際の日本人候補は、谷崎、西脇、川端、三島の4名であり、谷崎、川端、三島は有力候補になっている。1960年から1962年にかけては、日本外務省による推薦運動が、スウェーデンに駐在する松井大使と外務省本省によって展開されている。日本人初の受賞はかなわなかったが、スウェーデン・アカデミーへの情報提供を通じて日本文学への理解を促したという点では一定の効果をもったと考えられる。

第3章では、欧米諸国以外の作家がノーベル文学賞を受賞するためには、翻訳が重要な位置を占めることを2017年までのノーベル文学賞受賞者の使用言語を通して指摘し、さらにその事例として日本人候補の著作がどの程度主要言語に翻訳されているかを紹介した。谷崎、川端、三島の場合、1950年代中葉以降、翻訳が本格化し、徐々に国際的な認知度も増していったことがわかる。谷崎の翻訳では、サイデンステッカーやヒベットの英語訳がきっかけになり、他の言語にも翻訳が波及していった。他方、川端の場合は、主要著作の翻訳は、全体的に少ない傾向にあ

るが、ドイツ語訳、英語訳両面で進んだ。三島については、キーンらによる英語訳が中心であり、原著の出版から時間をおかずに次々に翻訳された。スウェーデン・アカデミーも、その翻訳の所蔵状況から三島の活動に注目していたことがわかる。西脇については、翻訳を含めて欧文著作が極めて少ない状況であった。作家とスウェーデン・アカデミーを結び付ける存在である翻訳者がいかに重要な役割を果たしているかが、明らかになった。

今後は、本稿で明らかになった事実関係を土台にして、ノーベル文学賞をめぐる日本人候補の推薦と選考の実態をより詳細に解明したい。

(よしたけ のぶひこ・高崎経済大学地域政策学部教授)

註

- 1) 本節の事例は、以下の拙稿においてすでに紹介したものであるが、その後判明したことを若干追加した。拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：序説」『地域政策研究』第12巻第4号、2010年3月、30～32頁。
- 2) 拙稿「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：吉田茂元首相の推薦をめぐる1965年の秘密工作とその帰結」『地域政策研究』第18巻第4号、2016年3月。同「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：吉田茂元首相の推薦をめぐる1967年の秘密工作」『地域政策研究』第19巻第1号、2016年8月。同「ノーベル賞の国際政治学——ノーベル平和賞と日本：吉田茂元首相の推薦をめぐる1966年の秘密工作とその帰結」『地域政策研究』第19巻第4号、2017年3月。
- 3) 松井大使（1908～1994年）は、在スウェーデン大使着任前には昭和天皇・マッカーサー間の通訳や外務省調査局長を務めた経験を持ち、離任後は国連大使（1963～1967年）、在フランス大使（1967～1970年）を歴任した。
- 4) ヴィレシュ（1911～1980年）は、スウェーデン王立図書館館長（任期1952～1977年）であると同時に、スウェーデン・アカデミーのノーベル委員会書記（任期1947～1967年）も務めた。
- 5) 「極秘 第136号、昭和35年3月23日、在スウェーデン特命全権大使松井明発外務大臣藤山愛一郎宛、ノーベル賞（文学）受賞候補者に関する件」（日本外務省外交史料館『ノーベル賞関係雑件』。以下、『ノーベル賞関係雑件』）。
- 6) 「極秘 情文第47号、昭和35年4月21日、藤山大臣発在スウェーデン松井大使宛、ノーベル賞受賞候補者に関する件」、「極秘 情文第50号、昭和35年4月27日、藤山大臣発在スウェーデン松井大使宛、ノーベル賞（文学）受賞候補者に関する件」、「極秘 第226号、昭和35年5月27日、在スウェーデン特命全権大使松井明大使発外務大臣藤山愛一郎宛、ノーベル賞（文学）受賞候補者に関する件」（『ノーベル賞関係雑件』）。
- 7) Junichiro Tanizaki(1960), s.1; Junzaburo Nishiwaki (1960), s.1. Swedish Academy Archives.
- 8) ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://www.nobelprize.org/nomination/>>およびスウェーデン・アカデミー史料。
- 9) 「秘 第4号、昭和36年1月31日、松井大使発小坂大臣宛、ノーベル文学賞受賞候補者に関する件」、「第52号、昭和36年2月2日、在スウェーデン特命全権大使松井明発外務大臣小坂善太郎宛、本年度ノーベル文学賞受賞候補者に関する件」（『ノーベル賞関係雑件』）。
- 10) 「秘 情文第25号、昭和36年2月23日、小坂大臣発在スウェーデン松井大使宛、ノーベル文学賞受賞候補者の件」（『ノーベル賞関係雑件』）。
- 11) ノーベル財団ノミネーション・データベース<<https://www.nobelprize.org/nomination/>>およびスウェーデン・アカデミー史料。
- 12) 同上。
- 13) Telegram from Yukio Mishima to Mr Willers, Nobel Prize Committee, Svenska Akademien, 1961, Swedish Academy Archives. 文面原文は以下の通り。I HAVE HONOUR TO RECOMMEND YASUNARI KAWABATA FOR 1961 NOBEL PRIZE FOR LITERATURE = YUKIO MISHIMA
- 14) Letter from Yoko Matsuoka, General Secretary, the Japan P.E.N. Club, to Mr. Willers, Secretary General of the Nobel Prize Committee, Svenska Akademien, 12 June 1961, Swedish Academy Archives. Yukio Mishima, "Recommending Mr. Yasunari Kawabata for the 1961 Nobel Prize for Literature," no date, Swedish Academy Archives.
- 15) "Recommending Mr. Yasunari Kawabata for the 1961 Nobel Prize for Literature", 「一九六一年度ノーベル文学賞に川端康成氏を推薦する（訳・佐伯彰一）」（川端康成・三島由紀夫『川端康成・三島由紀夫往復書簡』新潮社、1997年）、223～224頁。この『往復書簡』所収の英文推薦状とスウェーデン・アカデミー所蔵の英文推薦状は、文章の改行位置が異なるほか、1カ所異なる点がある。『往復書簡』所収英文の上から8行目から9行目「His choice of words dispaly as the maximum subtlety」は、スウェーデン・アカデミー所蔵のものでは「His choice of words displays the maximum subtlety」となっている。『往復書簡』所収の英文の誤植と考えられる。
- 16) 川端・三島、前掲『川端康成・三島由紀夫往復書簡』、139頁。
- 17) 同上、140頁。

- 18) 「第78号、昭和37年2月1日、在スウェーデン松井大使発外務大臣宛、ノーベル文学賞候補者に関するWillers書記長との会談に関し報告の件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 19) 「昭和32年10月28日、在スウェーデン特命全権公使島重信発情報文化局高橋参事官宛」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 20) 新倉俊一「主要欧文詩集訳詩 解説」(西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』別巻、筑摩書房、1994年)、124～138頁。
- 21) 新倉俊一『詩人たちの世紀——西脇順三郎とエズラ・パウンド』(みすず書房、2003年)、157～163頁。同『評伝 西脇順三郎』(慶應義塾大学出版会、2004年)、217～223頁。岩崎良三「伊訳『京都の一月』」(西脇順三郎『定本西脇順三郎全集』第11巻月報、筑摩書房、1994年)、7～8頁。岩崎のエッセーには、1957年8月21日付けでパウンドから西脇をノーベル文学賞に推薦することを提案されたとある。パウンド自身は推薦資格がないとして、「日本のアカデミイかその他適当な機関を通じて推薦するがよい」と指示されている。それに付け加えて、岩崎は「間もなく当時ノーベル賞選衡委員の一人であったハマーシュルド国連事務総長から私に先生の業績を詳しく教えてくれという来信があった」と記している。ハマーシュルドの話は、西脇が1958年のノーベル文学賞に初めて推薦されたことを受けたものと考えられる。
- 22) Utlåtande av Svenska Akademiens Nobel kommitté 1958 jämt särskilda yttrande, s.4. Utlåtande av Svenska Akademiens Nobel kommitté 1960 jämt särskilda yttranden, s.8. Utlåtande av Svenska Akademiens Nobel kommitté 1961, s.9.
- 23) 「極秘 情文第50号、昭和35年4月27日、藤山大臣発在スウェーデン松井大使宛、ノーベル賞(文学)受賞候補者に関する件」(『ノーベル賞関係雑件』)。
- 24) アンダーシュ・エステルリング「川端康成に対するノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説」(『ノーベル文学賞全集』第16巻、主婦の友社、1971年)、9頁。
- 25) たとえば、ドナルド・キーン『ドナルド・キーン自伝』角地幸男訳(中公文庫、2011年)、203-210、271-275、276-284、289-292頁。

#### 付記

本年度をもって本学地域政策学部を定年退職される津川康雄先生には、学部創設以来、長い間、大変お世話になりました。ご指導、ご支援に対して心よりお礼申し上げます。ご研究のますますのご発展とご健勝を祈念いたします。

本稿は、2018年度科学研究費補助金(課題番号18K01471)による研究成果の一部である。